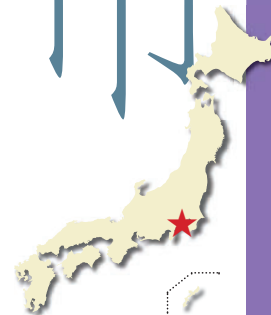


平塚市



湘南ひらつかビーチクラブ
会長
北澤浩一さん
昭和54年農獣医学部獣医学科卒業



◆プロフィール
北澤浩一(きたざわ・こういち)
本学卒業後、学部附属家畜病院に勤務。2年後、北澤獣医科病院の獣医師に。現在、同病院長、神奈川県獣医師会副会長。勤務のかたわら、フルグラス(カントリー系音楽)のバンドを組み、ヴォーカルとギターを担当している。年に数回ライブを開催するほか、福祉施設での演奏なども行っている。

市民が集える施設として、海岸の多彩な楽しみ方を提案

平成2年、平塚市で海水浴だけではない新たな海岸利用を考えるイベントとして、「相模湾アーバンリゾートフェスティバル(SURF 90)」が開催された。当時、平塚青年会議所の副理事長を務めていた北澤浩一さんはその企画・運営に参画。海水浴場がなく、湘南海岸では無名だった平塚市の海に、大きな魅力があることをアピールした。



それをきっかけに平塚市では、海を楽しむ施設として会場跡を活用する機運が高まった。海岸は県が管轄しており、一般的には夏期にだけ利用が許

されるが、海水浴ではなくビーチ・マリンスポーツであれば通年できる。北澤さんらは熱心な働きかけを行い、日本初の通年利用施設「ひらつかビーチパーク」の誕生にこぎつけた。
「当時はビーチバレーのネットを張る許可を週末ごとに申請に行きました。そのうち県の担当者も『ずっと張っていいです』と(笑)。先駆者だった川合俊一さんを招いて、ビーチ活用のシンポジウムを開いたりもしました。しだいにヨット、サーフィンなどの仲間も集まるようになり、平成4年に湘南ひらつかビーチクラブが発足したんです」
現在、同クラブの会員数は約200人。子どもから大人まで、海を自由に楽しむのが主目的だ。道具はできるだけ共有し、海のコンディションに対応した種目や方法を選択する。やりたいことがあれば一人でも部会を作ることができ、現在28部会が自主的にイベントを企画している。「海を使ったレジャーやスポーツは多彩ですが、一般の人はなかなか参加しにくい雰囲気があり



ビーチパークには10面のビーチバレーコートがあり、そのメッカとして親しまれている(上)ビーチでは年間を通して様々なイベントを開催。毎月第二土曜日にはビーチスポーツ無料体験会を開催。夏期はサーフィンもできる。日本サーフィン界草分けの井坂啓己(ドジ井坂)さんが参加することも(中)ビーチセンターは海岸の公民館的な役割を果たしており、売店やシャワールーム、コインロッカーなどの設備も整っている(下)

神奈川県平塚市▶あれこれ



平塚市は東海道7番目の宿場町として栄え、明治期に軍需工場が設置されると工業都市としても繁栄を迎えた。現在もわが国を代表する企業の工場施設が多数設置されている。一方、広大な平野を活用した農業も盛んで、神奈川県1位の水稲生産量を誇る。トマト、キュウリなどの野菜や、バラやシクラメンなど花の栽培も盛んだ。ひらつかビーチパークがある平塚海岸は全長約4kmの海岸で、晴れた日には大きな富士山が望める。昭和初期には多くの海水浴客でにぎわっていたが、海底が急に深くなるなどの理由から閉鎖。復活を目指して平成8年から沖合にT字型の堤防を作り、浅瀬の海を創出した。現在はビーチパークの「砂浜ゾーン」で海水浴が楽しめる。

特集

地域を元気に

～独自の活動でその魅力を発信する校友たち～

ます。当クラブは商行為以外ならば基本的に何をやっても自由。たとえば、海岸で民謡を踊りたければぜひ踊ってほしい(笑)。常識にとらわれないう、新しい海の楽しみ方を提案してほしいですね」
同クラブのコミュニティ活動を通じて、着実にビーチパークの認知度は向上している。しかし、周辺の鎌倉市、茅ヶ崎市などに比べると、平塚市はどうしても知名度が劣り、市は施設やイベントなどに「湘南ひらつか」という名称を用いている。その現状を変えるのが北澤さんの目標だ。「もちろん、観光客相手だけの大型商業施設やレジャー施設などを作っても意味がありません。周辺にいくらかでもありますし、永続的に

続くわけがない。平塚市は魚や野菜がおいしく、落ちついた雰囲気の暮らしやすい町です。レジャーに訪ねてもらおうだけではなく、住みたいと思ってもらえる町にしたい。海づくりではなく町づくりがあくまで重要です」
最近では市外・県外からの利用も増えた。うれしい反面、平塚市民にもっと地元のビーチとして利用してほしいというのが願いだ。親子で気軽にビーチスポーツを楽しんだり、魚料理の教室などを開いたり、市民が集う公民館のような機能を備えていきたいと考えている。同クラブの運営は「かつこよく言えば使命」と笑う北澤さん。実現したいことは、まだまだたくさんある。

